

みめぐみの

第30部



園

みめぐみの

第30部



大谷光道著

目次

僕が壊れてしまう	3
僕が壊れてしまう	3
お金で買えないもの	6
分け方、色々	10
信心と生活	15
阿弥陀様と本願(一)	18
本願	18
願いと誓い	21
先ずは第一の願から	24
あとがき	30

僕が壊れてしまふ

本願寺では、『みめぐみの』各部の解説をしたり、皆さんのが思われることを話してもらったりする集まりを毎月二回持っています。いずれ「○○講」^{こう}のように名前を付けねばなりませんが、今はたんに「お講」と呼んでいます。近所の方、二時間もかけて来られる方、境内の前の掲



6月25日 大阪・清交社での講演

示板を見て参加される方、時には半日もかけて来られる方もあり、皆さんと和気あいあいの一時間過ごしています。

はじめに皆で『正信偈』のお勤めをします。お講を始めたころは私一人でどうなることかと思っていたのですが、このごろ後ろから声が聞こえるようになり、少しずつその声が大きくなってきて、頬もしくなってきました。

僕が壊れてしまう

この間、お講の始まる前にA君というある青年が相談を持ちかけてきたので、今日はそのお話からと思います。

「普段、お寺でお話を聞いたりした経験はなかったのですが、知人にこちらのことを聞いて『何か答えやヒントがあればなあ』と思つてここに来たのです。」

と前置きして、話の概略は次の通りです。

「十年ほど前から友人と共同でコンピュータ関係の会社を経営していく、二年ほど前にその友人に会社を任せた。その後、仕事の報告は受けていたが、先頃急にその友人がどこかへ消えてしまつた。はんこをはじめ何から何まで、お金も全部持つたまま行方不明になつて、何がどうなつているのかさっぱりわからなくなつた。信頼していたことが全部嘘だつたような気がして、そういう人間不信で頭がパニックになつてしまつた。」

それで、「僕が壊れてしまいそうです。どうしたらいいでしよう」と悲壮な思いをぶつけてきたのです。そこでかなりの冒険でしたが、「そんな簡単には壊れるものなら、いざれどうかなる。いつそう壊してしまつたらどう?」と、「荒療治」をしてしまいました。彼は一瞬ハツとして蒼くなつたのですが、そのあと「これで、吹つ切れました」と、晴れ晴れとした顔つきになつたので、私は「良かった」と内心胸をなで下ろしたものです。迷つていたところで、背中をポンと押されたのでしょう。

そこで、どうしても聞いてみたい質問がありました。「何も私の所へ来ずに、新しい宗教があつちこつちにいっぱいあつて信者獲得に一生懸命なのに、そちらのほうへは何故行かなかつたの?」と。「お金儲けとか、日常の経済活動と同じでしょ? そういうところには興味がありません」と、あつさりと言いのけてしました。はじめはすぐには意味がわからなかつたのですが、そういう新しい宗教がみんなそういう風かどうかはともかく、多くの宗教団体の説くところが「日常の経済活動の延長」というふうに彼の目には映つていたのです。

神や仏には現世の御利益——お金儲けとかですね。合格祈願とか、あるいは安産の祈願とか。家内安全、商売繁盛、中には心願成就（思つてのことがなんでも実現する）など——をお願いするのが信仰であると思つていてる方が結構おられる世の中で、ずばっと彼が「日常の経済活動の延長」と言つてのけてくれたことに大変感動し、驚きました。彼は今まで宗教とは全く無縁

で、宗教について考えることすらもない生活をしてきた人なものですから、私の驚きはなおさらでした。さらに、いわゆる現世利益というのは仏教の本質ではないということを説明するのに何かと苦心している私は、「こういうわかりやすい言い方があるとは」と彼に教えられ、まさに目から鱗うろこでした。ですから、彼は「日常の経済活動」によつてあらゆる物事が満たされたとしても、心の支えを持つているかどうかとは全く別のことであるということを、身体をもつて教えてくれているのです。

お金で買えないもの

よく「お金では買えない物がある」と言います。たとえば、こじれた人間関係の修復、亡くなつた肉親の命（生き返ることはない）、失つた時間（年は取るもの）、友情、人のまごころ、等々がそれで、中でも「心の支え」はそのもつとも大きな部分を占めるもので、他のお金で買えないものを解決す

僕が壊れてしまう

る原動力にもなるものと言えるでしょう。

さて、「心の支え」といえば種々考えられますが、その中で彼の求めてきたものは、言うまでもなく宗教でした。私はよく現世利益についてお話し



4月12日 宗教法人設立奉告法要奉讃狂言 茂山千五郎家

ますが、いま問題にしているのは、浄土真宗で言う心の上で現世利益ではなく、神仏にお願いしてそのお力によつて自分のこの世（現世）での「物」を中心としたご利益をいただくという、一般に言われるいわゆる現世

利益です。

彼はこの現世利益のことを「日常の経済活動と同じもの」と見て いるのですが、神仏に現世のご利益をお祈りするというのは本当に悩みがあつてではなく、よくよく考えてみるとそれは己の「欲望」であり、悩みと欲望を混同してしまつて いることがわかつて きます。本気で願うのであればあるほど、願いを実現するには自分自身の努力しかないということが見えてくるはずです。

ただ そうは言つても、たとえば病氣平癒(へいゆ)のお祈りともなると、欲望として切り捨てるには人情として難しいものがあります。しかし仏様は私たちの身体を治すのがお仕事ではなく、私たちの心に働きかけて、安らかな心、強い心を与えてくださるのがお仕事だということ、そして同時にそのような仏様にその欲望を満たすための手伝いをさせようとしていたことに気づく必要があるで しょう。つまり、私たちがいわゆる現世利益に誘引(ゆういん)されるのも仏様の

方便（「手だて」のこと）の一つだと考えられるようにならねばなりません。言い換えれば、祈りたい気持ちをバネにして、信仰をより深めていかねばなりません。

蓮如上人が「仏法のことは人に問え問え。知っているはずの人が案外知らなくて、知らなきそうな人が知ってるものだよ」と仰っていますが、彼の一件でつくづく感じたのは、まさにこのことでした。

蓮如上人、折々仰せられ候ふ。仏法の義をばよくよく人に問へ、物をば人によく問ひまう（申）せのよし仰せられ候ふ。たれに問ひまう（申）すべきよしうかがひまう（申）しければ、仏法だにもあらば、上下をいはず問ふべし、仏法は知りさうもなき者が知るぞと仰せられ候ふと云々。

『蓮如上人御一代記聞書』

分け方、色々

信仰の世界はわかつたようでわからない、正直言つて、時として、つかみどころのないものに思えることがおありでしょう。ところが、「現世利益は日常の経済活動の一部であり、自分の求める心の支えを満たしてくれるものではない」という彼の話から、信仰とはどんなものかがはつきり見えてきます。そこで、信仰の世界と、そうでない世界の、他の分け方を見ていくことで、さらに信仰とはどんなものかを浮き彫りにしてみたいと思います。

一、物と心

よく使われる分け方なので、説明は要らないと思います。ただ、「物」はいいとしても、「心」のほうは範囲が広くなりすぎる嫌いがあります。つまりたとえば「物に惹かれる心（物欲）」も「心」の動きなので「心」のほうに入ってしまいそうで曖昧あいまいになる嫌いがあります。そうなので、「物」に入

れるべき現世利益も「心」のほうに入れられがちです。

二、価値と意味

私が本紙『二十八部』で述べた分け方で、価値と意味は「価値を感じる心の部分」と「意味を感じる心の部分」という意味です。

価値というのは、文字通り物の値打ちということで、お金もそうだし、地位とか名誉とか、そういう社会的な、客観的にわかるものです。物の面で生活を豊かにしようとする欲求ももちろん入りますが、価値を感じ価値を追求する心は、「欲望」がその原動力であることは否めません。

欲望というのは、一つの欲が満たされると次の別の、あるいはもつと大きな欲望が顔を出してきて、またさらに欲望が出てきて……、そういうのがエンドレスで、どんどんエスカレートしていくような、欲望にはそういう特色があります。

こういう価値を追いかける世界は、どこまでいっても終わりません。振り

回されて、振り回されて、いざれその途中で自分の命の終わりがやつて来る
というもので、価値のみの生活はこのようなものです。

しかし私たちは日常生活の中で、この価値ということを度外視して生活す
ることは出来ません。それどころか、日常生活の大部分でこの「価値」のこ
とを考えていないと、世の中から取り残されてしまうことにもなります。

意味のほうは、個人的・内面的・主観的なもので「自分にとつてだけの価
値」とでも言えるものです。意味はその中身が深まることはあつても、欲望
のようにエスカレートしエンドレスなものではありません。

意味を追求する心よつて得られるのは、自分で納得していく道であり、
安心して落ち着ける場所です。

三、世間と出世間

世間せけんというのは私たちの生活するこの世界に心が向いてる状態です。出しゅつ

僕が壊れてしまう



目に見える形のことではなく、あなたにでも通用することで、心が「教えを求める」方向に向いている状態です。殊に浄土真宗は在家仏教といわれるように「家」にあつて仏道を志すのですから、お説教を聞くのも、仏壇にお参りをするのも、お念佛を称えるの



6月14日 富山県井波・聞信会

も、すべて「出世間的要素」以外の何物でもありません。

四、日常と非日常

非日常というのは、日常の生活に対して日常的にではなくて時々考えたり関わったりする事柄という意味です。

日常と非日常の卑近ひきんなたとえですが、三度の食事に対してデザートとか別腹を分けてみるのもいいでしょう。三度の食事は私たちの生存に必要ですが、デザートはなくとも、別腹は空っぽでも生命には影響ありません。しかし実際にには動物としての生命があるのみでは、私たちは満足できないことに気づくはずです。

以上は、色々な分け方を思いつくままに並べてみただけなので、このほかにもまだまだあると思います。皆さんも考えてみてください。目的は、私たちの信仰とは心のどんな部分を占めているのかを考え、信仰をより深めるにはどうの方向に努力したらいのかを考えることなのです。

信心と生活

これらの分け方は、使った用語の違いに応じて、それぞれの分け方ごとに境目に少しずつずれがあり、また、二つに分けたどちらに重みがかかるつくるかにもそれぞれ違います。

淨土真宗では古来、「しんたいもん真諦門」と「ぞくたいもん俗諦門」という分け方をします。

「諦」(たい)とは不变の教理の意味です。真諦門とは出世間の法、つまり信仰面で、信心を求めることです。俗諦門とは世間的な面、国の法や人道を守る面を言います。前者は信心、後者は生活ということができます。

出家を条件とする聖道門の教えでは、社会を超越し家にあつての生活をする必要がありませんが、自力の修行に耐えない凡夫のために説かれた淨土真宗では、社会の秩序を守りながら念佛の生活を実践する必要があるので、倫理的であることが条件となります。したがつて、先に述べた「世間と出世

間」と同じ分け方ではありますが、特に「俗諦門（世間）」については、ただ「世間に身を置いている」というだけの意味では不十分であることがわかります。

仏法王法は一雙の法なり。鳥のふたつの翼のごとし、車のふたつの輪のごとし。ひとつもか（欠）けては不可なり。かるがゆえに、仏法をもて王法をまもり、王法をもて仏法をあがむ。《存覚上人『破邪顯正鈔』》
ほか（外）には王法をもておもて（表）とし、内心には他力の信心をふかくたくは（貯）へて、世間の仁義をもて本とすべし。これすなはち当流にさだむるところの、おきて（撻）のをもむき（趣）なり。

《蓮如上人『御文』二帖目第六通》

王法（おうぼう）＝仏法に対する語で、国王の法令や政治のこと
当流＝宗祖・親鸞聖人の教えの流れ。浄土真宗のこと

私たちは真諦門と俗諦門のいずれにも心する必要があり、両方のバランスが保てることが、真宗信者の鑑かがみと言わされてきました。皆さん、ご自身のことを見てみてください。

『編集部註』このお話は、五月二十五日、大阪全日空ホテルにて開催された清交社での講演内容を骨子に、浄土真宗の色を濃くしたものに仕上げて下さいました。

阿弥陀様と本願（二）

先の『三十九部』では、阿弥陀様がお出ましになるよりはるかに前のことからお話ししました。そして、法藏菩薩が長いご修行の後阿弥陀様になられ（成仏）、同時に極楽淨土が完成したことについてまで述べました。

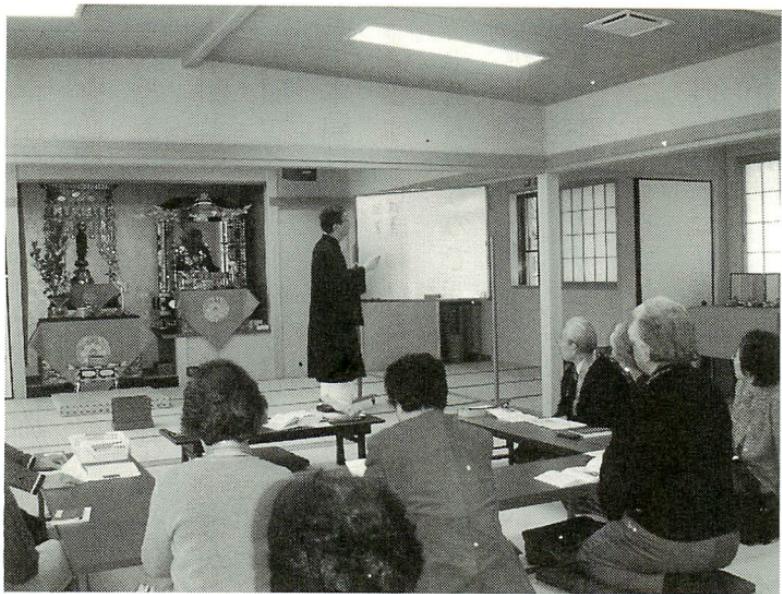
今まで、本願、本願、との単語だけをやかましく唱えてきた感があるかもしれません、今回は、いよいよその阿弥陀様の本願の中身のお話しに入りましょう。

本願

「本願」というと、阿弥陀様の本願が浮かんできます。しかし「本願」は阿弥陀様だけのものではなく、菩薩が修行して仏（如来）になろうと志されるとき「私は、……のような仏になりたい」と言って表された願いの内容を本願といいます。したがって、ほかの仏様、たとえば薬師如来には「十二の大願」という本願があります。

本願は菩薩の修行によつてそれが成就（完成）して、菩薩が仏様（如来）になつてしまわると、願いが達成されたわけなので、本願というのはもはや過去のもので、蟬の抜け殻のよう^{せみ}に要らなくなつてしまふはずです。したがつて、「阿弥陀様の本願」というのはありえないことになります。それでも、本願が成就した後も同じく本願と言うのです。

これはなぜでしょうか。そもそも法藏菩薩は「お前たち衆生を助けてやりたいために、私は成仏したいのだ。」と願われたのですから、ご自身の成仏と衆生済度という願いが二重になつていたのです。そして法藏菩薩の衆生済



お 講

度は、衆生の中でも特に「いざれの行も及びがたい凡夫」という他の仏様が「手の付けてみようがない」と仰つて捨てられた者たちをお目当てとした衆生済度だったのですから、その願いはいつまでも変わるはずもなく、阿弥陀仏として成仏された後も同じく本願のままでなければならぬことがわかります。

さらに言えば、本願の中心は“仏になること”ではなくて“凡夫を成仏させること”だつたのです。ですから、法藏菩薩が成仏されて阿弥陀

仏となられても、『凡夫を成仏させること』への願いはなくならないどころか、まさにそれが阿弥陀様のお仕事であるわけです。

このように、法藏菩薩が成仏されたのは、凡夫を成仏させるための成仏で、成仏はむしろ「通過地点」、あるいは「手段」だと考えたほうが事実に合っていると言えましょう。それほどにご自身のことは全く念頭に置かず、凡夫を助けることのみでおいでになるのです。このような成就後の本願はむしろ「阿弥陀様が私たち衆生に懸けられている願い」という意味になり、やはり本願は本願のままでなければなりません。このようなわけで、四十八願というものは元々は法藏菩薩の四十八願なのですが、阿弥陀様の四十八願でもあるわけです。

願いと誓い

さて、それでは阿弥陀様の四十八の本願の中身のお話しに移りましょう。

阿弥陀様の本願・四十八願には、阿弥陀様はどんな仏様か、阿弥陀様の作られた極楽という国土はどんなところなのか、そこに住んでいる人はどんな人たちなのか、そしてそこではどんな生活が営まれているのか、そして何よりも「どうしたらそこに行けるのか」という私たちにとつてもつとも関心の深いこと、その他極楽の全てが述べられています。

それは、聖徳太子の十七条憲法や国の憲法のようでもあり、国連憲章のようでもあり、またもつとわかりやすく言うと、旅行代理店の店先に並んでいるパンフレットのようでもあります。

四十八願は全て

「設我得仏……不取正覺」（私が成仏するとき……のようでありたい。

そうでないならば、覚ったとは言いません。）

の形になつていて、

「設我得仏」は「願い」、「不取正覺」は「誓い」

ですから、この意味で本願を「誓願」とも言い、本願と誓願は同じ意味です。卑近な例で申し訳ないのですが、人間同士の交わす書類に「誓約書」というのがあります。誓約書には本文のあとに必ず「これが守れないときには、○○されても異議は申しません。」のような「誓い」の一行が入っています。このようなナカルティの一一行は誓約書には欠かせないもので、もしそれが入つていなければ誓約書があつたとしたら、それは誓約書でなくただの紙切れだと言われてしまします。本願の一つ一つの最後に「不取正覚」が付いているところに、法藏菩薩の固いご決心が示されているのです。

この四十八願の全てをここでお話しするとなると、この『みめぐみの』が何冊あっても足りるものではありません。そこで、私たちにとつてどの部分が一番身近で気がかりかというと、やはり「どんなところなのか」と「どうしたらそこに行けるのか」ということでしょう。「どんなところなのか」については、極楽はこの世とかけ離れて素晴らしいところとして、その昔から

だれしもが行きたいとあこがれてきたところで、それほど昔の人が太鼓判を押しているので、今さらお話しはするまでもないようですが、「どうしたらそこに行けるのか」の前に、少しば見てみることにしましょう。

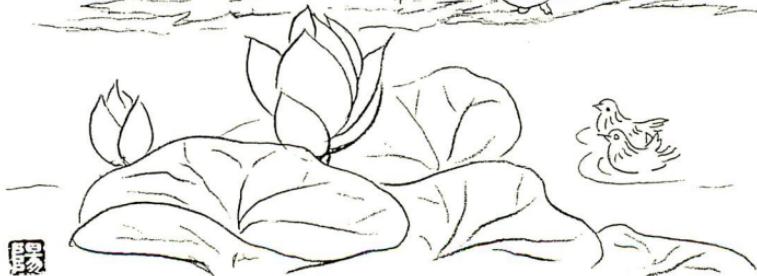
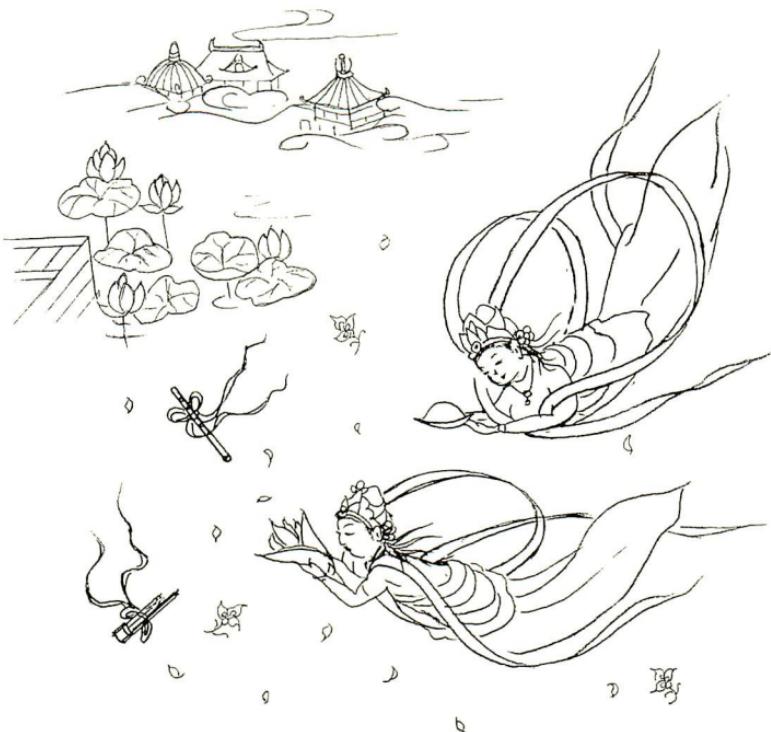
先ずは第一の願から

まず、四十八願のうちの第一願と第二願です。

設我得仏、こくう國有地獄・餓鬼・畜生者、不取正覺　（第一願）

私が成仏するとき、國（極樂）に地獄・餓鬼・畜生があるならば、覚つたとは言いません。

私たちはこの世に生まれるまでに、地獄・餓鬼・畜生・修羅しゅら・人間・天上という六つの境界（六道）を生まれ変わり死に変わり（輪廻）して来たものですが、この世での命が終わつたら今までに犯した罪惡に引かれて、来世は地獄・餓鬼・畜生という三惡道のいずれかに生まれる可能性が極めて高いと



極 樂

言えます——もちろん、人によつて違うことではありますがね。仏教で悪と言えば「十惡」で、殺生（生きものを殺すこと）・偷盜（人の物を盗むこと）・邪淫（夫または妻以外の異性と交わること）・妄語（嘘をつくこと）・綺語（眞實にそむいて言葉を巧みに偽り飾ること）・惡口（人をののしること）・兩舌（他人の仲を裂くことば。一枚舌）・貪欲（財物などをむさぼり飽くことのないこと）・瞋恚（怒り、憎むこと）・愚癡（愚かでものの道理を解さないこと）です。これを見ると、生まれてからこのかた精進料理のみできた人ならいざ知らず、殺生の罪は犯しているのが普通だし、嘘をついたことがないとか、怒りの感情を持ったことがないとかいう人もまずいなと思います。

このようであるからこそ、何とかして阿弥陀様のお淨土（極樂）に生まれることが出来ないものかと考えます。

設我得仏、國中人天、壽終之後、復更三惡道者、不取正覺（第一願）

私が成仏するとき、国（極楽）中の民間・天人たちが、極楽での命が終わった後に、再び三悪道（地獄・餓鬼・畜生）にかかるならば、覚つたとは言いません。

先の第一願によつて極楽には三悪道はなく、一度極楽に生まれたならばこの第二願によつて一度と三悪道に墮ちることがないので、こんなにいいことはありません。

親鸞聖人は、『淨土和讃』に次の一首をお作りくださっています。

三塗苦難ながくとぢ

三悪道の苦しみが永遠になく

但有自然快樂音

ただあるのは、自然の快い音楽だけである。

このゆゑ安樂となづけたり
無極尊を帰命せよ

この故に、「安樂」と名付けたのである。
阿弥陀仏の教えに心を傾けなさい。

三途（塗）＝三悪道

安樂＝極楽

無極尊＝阿弥陀仏

御和讃のはじめに出てくる「三途（塗）」とは、三悪道（地獄・餓鬼・畜生）のことですが、地獄は火に焼かれることから火途かづと言い、畜生は親子であつても互いに食い合うことから血途けちづと言い、餓鬼は刀・剣・杖等で迫害されることから刀途とうづと言い、三つ合わせて三途です。

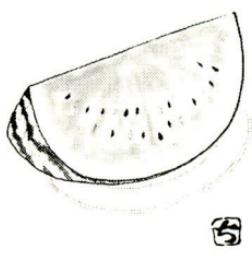
新聞を見ると毎日のように、事故や災害の記事、動機の理解できない殺人事件で紙面があふれています。そうは言つても、やはり現在我が国は平和で、これらの記事は「他人事」として過ごしてしまっているのではないでしょうか。健康に毎日を送つていると、「死」は脳裏をよぎることすらなく、まして死んでからどんな所へ行くかなどの心配とはおよそ無縁です。

しかし、事故や災害、あるいは何かの事件に巻き込まれて命を落とされた方たちも、その多くはおそらく私たちのような平和な暮らしをされていたはずです。そう考えると、これら三途のいずれかに生まれ変わることのないよう、何とかして極楽に生まれ変わるように、普段からしておきたいもの

です。

『編集部より』富山県・河合寛さんと神奈川県・豊田租さんよりご質問の葉
書をいただいておりますが、次号に掲載させていただきます。

〔以下次号〕



あとがき

みめぐみの刊行委員会

常に「わかりやすい浄土真宗」をと心掛けられる光道台下は、本願寺内の月二回のお講始め、内外で講演や法話に精力的に取り組んでおられます。前半では、そんな中から大阪・清交社での講演を骨子に「現世利益」と「信仰」の違いを段階を経ながら説明し、俗・眞のバランスのとれた信仰の大切さを教えて下さいました。

後半は前回に引き続き「阿弥陀様と本願」の第二回で、いよいよ本願の内容の解説へと進み、次号にと続いていきます。今回は極楽と現世との違いの一部についてのお話でした。「どうしたら極楽にいけるのか」についてはこのシリーズの少し先になるのではと思われます。楽しみに通読したいものです。

「天皇陛下の従兄弟さんが建
立なさった嵯峨野・本願寺」が、
春先に宗教法人の正式認証を行
つて生まれ変わる予約切符だ
立たない。

天皇陛下の従兄弟

大谷光道さん(62) 京都に3つ目の「本願寺」! 仏教界騒然の新宗教法人を設立



受け、親鸞上人の教えを
布教し始めた「うやあ」
千年の古都・京都の仏教界
は、西本願寺、東本願寺に続
く3つ目の「本願寺」出現の
話題で持ちきりだ。

従兄弟さんは、浄土真宗の開祖・親鸞上人の血脉を
800余年にわたって受け継いで
きた大谷家の第25代当主・大
谷光道氏(62)。

光道氏の母は香淳皇后さま
の実の妹で、第24代当主・大
谷光暢法主に嫁がれた故・
智子さん。つまり光道氏は天
皇陛下の従兄弟になる。

音楽好きの香淳皇后に、手
作りオーディオアンプを京都
から皇居まで自分で車
を運転して、お届けに上が
った。生まれば変わる予約切符だ
立たない。

「うやあ」とは、浄土真宗の開祖・親鸞上人の血脉を
800余年にわたって受け継いで
きた大谷家の第25代当主・大
谷光道氏(62)。

たこともありました。使い方
をお教えると、目を細めて
喜んでくださった香淳皇后の
お目もとが、私の母とそつ
りでした。

「うやあ」は、新寺建立の真意に
ついても語ってくれた。

「父は、浄土真宗の教えが東
本願寺で正しく布教されてい
ないことに心を痛め、是正の
ための努力を重ねていました。
たとえば親鸞上人の教える
往生とは、現世では信心
を得ると同時に、命終わつて
からの極楽往生が確定すると
いう意味です。ところが東本
願寺には、信仰によって、こ
の世で往生・成仏する」と
上人の示した教えを布教する

の世で貰えるのは、極楽に行
つて生まれ変わる予約切符だ
立たない。

「お東紛争」を、大谷家と内局(宗務行政
組織の内閣)との権力争いと
誤解なさつた方もいたかと思
います。しかし真相は、こう
した浄土真宗の教えとは異なる
説を唱える人たちと、教え
を守ろうとする父との対峙が
根本でした。

対立が激化した結果、宗務
権限を剥奪され、「89年に妻・
智子さんを失くした24世は、
'93年に寂しく他界した。その
夜、父の遺書を読んだ光道氏
は男泣きしたという。

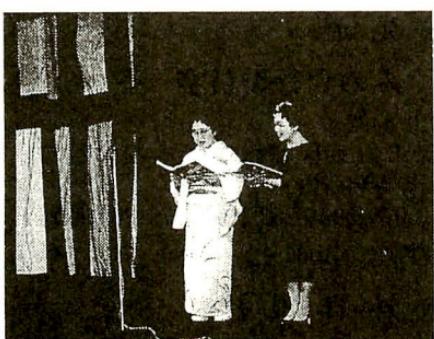
(四男)光道氏こそ、大谷
家25世を伝承する者である。
そして将来、必ず宗祖・親鸞
上人の示した教えを布教する

と信じる……》(要約)

父の無念さを思い、どんな

苦労をしようと父の遺志を
繼こう、と決意したのだ。

「私の母が愛した混声コーラ
ス『大谷樂苑』も、ここで再
発足しています。父と母がそ
うであつたように、親鸞上人
の教えを伝承しながら、この
新天地でお念仏に生きるつも
りです。ご本堂も年内に着工
したいですね」



香淳皇后さま(左)とテュエット
する光道さんの母・智子さん

本誌二十九部「ご挨拶」中で本願寺の存立意義についてのお話がありました。
記事中に往生・成仏についてもふれられていますので、関連記事として転載させていただきます。

『女性自身』平成19年5月22日号

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの 第30部

2007年7月5日 印刷 定価 200円
2007年7月10日 発行

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

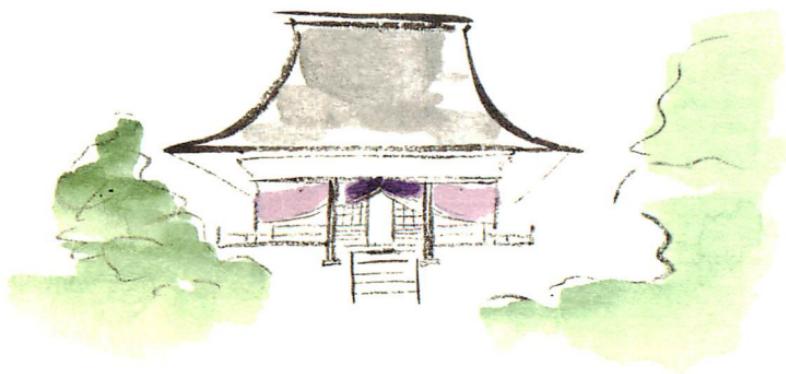
〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめじみの刊行委員会刊